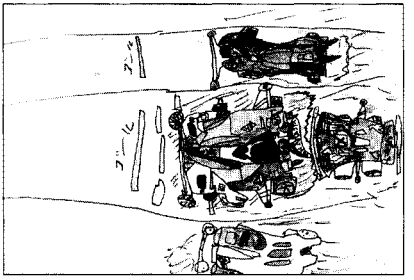
第四章
一緒に逝きたい



西山由樹くん（小４）・絵

震災遺児家庭訪問調査。204世帯、のべ812人のボランティアがインタビュー調査する。お母さんは、セキを切ったように話す。

神戸事務所で、樋口、八木職員と打ち合わせをするボランティア学生。

作文集

二人だけの「だんじり」

小学五年　銘田真奈美

お母さん、お元気ですか。私も奈津紀も他のみんなも、元気が良すぎて困るくらい元気で過ごしています。でも、たまに神戸に帰った時、お経を読んだり、お母さんの写真を見たりすると、地しんの前の出来事を思い出してしまって涙がでてきます。

特によく覚えているのは、だんじりと盆おどりの時のことです。だんじりの時、私が学校終わって帰ってきたら、みんなは練習を終わって帰っても、お母さんは一人だけで残って練習していたね。私にハッピを出して着せてくれたよね。私が一生けんめいタイコをたたいていたら、お茶をもってきてくれて、とってもうれしかったよ。

二人だけのだんじり、とても楽しかったよ。盆おどりの時も、お母さんは最初から最後までしゃべりもしないで、ずうっと踊っていたね。お母さん一人だけゆかたを着ていなかったから、少しはずかしかったけど……。でも、私にはそんなお祭り好きの明るいお母さんが「自まん」だったよ。

時々けんかもしたけど、その時お母さんがどなった一言一言が、今ではなつかしく、ありがたい気がしています。本当にありがとう。これから、がんばってみんなで暮らしていくから、天国でずうっと見守っててね。

一緒に逝きたい

一歳の息子はかすり傷もなく救出され、次いで私。亡くなった主人が一番最後でした。

私は足に柱だとかが落ちてきて、いまだに筋肉が死んだ状態です。先生には、回復は保証できないと言われましたが、今は週に三回病院に通い、不自由ながらも歩けるようになりました。

夫を亡くした寂しさは最近になって身にしみます。曲がったことが大嫌いで、恩のあるなしに関係なく誰にでも誠意を持って接する夫と出会え、本当に幸せでした。いつまでも、どこまでも、一緒にいようと誓いあったのに……。

地震直後は頭の中が混乱していて、夫の死が信じられず、楽しかった思い出だけが走馬灯のようによぎっていました。動物園や水族館へ行った時のこと、二人目の子もほしいと話し合っていました。お葬式の時も本当に悲しくて、

「一緒に逝きたい」

そう言ってかなり迷惑をかけました。一時期は銀行やら役所の用事で忙しく、少し忘れていた期間があったんですけど、一段落してみると、また悲しさがよみがえってきました。

命が助かってよかったね、と声かけてくださる方もいますが、助かりたくなかったと思った時期もありました。こんなケガをして子どももいて、だったらいっそのこと、三人一緒に死ん

だほうがよっぽど楽だった。今もそう思うんです、すごく。

がんばらなければいけないと思う自分が半分、もう半分は、あと何年こういう気持ちでいるのかなあとか、どうしたら脱出できるのか、そんなこと考えています。

お金さえあれば家具とか買い換えられます。結婚式や子どもが生まれた時のビデオ、写真、全部ないんです。近所の商店街から出火して全部焼けてしまいました。夫は子どもが大きくなった時にそれを見せるのを楽しみしていたのに、もうできません。

実家にあった写真数枚を譲り受けて、子どもはその写真に向かって「とうちゃん」と呼んでいます。

地震がなければ今頃は、夫の実家の土地に家を建てていたと思います。夫の実家では今でも、一緒に住もうと言ってくれていますが、夫もいないのに一緒に住むのはむずかしいでしょう。実家にしたら孫がかわいくてしようがないとは思いますが。

三月に退院して二回目の抽選で仮設に当たりました。入った当初は自分たちの空間ができてよかったんですが、住み始めるといろいろ問題が出てきました。雨漏りして役所に電話したんですけど、四回目にやっと業者の方が来てくれました。業者の方は初めて聞きましたって。

子どもが小さいですし、生活がかかってますから絶対に働かなければいけないのですが、職が少ないそうで。元気な方でも仕事がないのに、私なんかはむずかしいかなあと思うんです。

小さいモコモコと大きいモコモコ

とっさに、神様仏様助けてーって、思いました。心底恐かったです。家の中にあるものの異様な動きがとくに恐い。地震の時は机の下に入るようになんてよく言われますが、実際にはあの重たい机が飛ぶんですよ。その下に避難していたってダメ。家具のあまりない部屋で、動き回らず布団を被っていたんで助かったんです。たまたまお茶瓶に水を入れていたのもよかった。恐怖で喉がカラカラになるんです。布団とお水ですよ、役立つのは。

私は、すぐ娘のところに行きました。娘は当時身重だったんです。

ダメでした。テレビが当たり、その上に二階のひさしが落ちてきて。おなかの子供をかばうような恰好で、眼球が一センチも前に飛び出した状態で亡くなっていました。十時間後に助け出してくれた人は、目をもとの位置に戻してくれたそうですが、あまりの無残な姿に涙が止まらなかったそうです。

娘の長男も、揺れの時にバッと動いて壁にはさまれてしまい、やはり亡くなりました。後から見つかった小さな遺体に、自衛隊の人が手を合わせてくれていた光景が忘れられません。

出勤のために起きていた婿、なぜか段ボール箱の中にいた幼い次男は助け出されました。病院に行って、婿に、

「お母さんもお兄ちゃんも、元気だからね」
って、嘘つきました。
ようやく二人の遺体を焼くことができた時、娘の近所の奥さんが次男を抱きながら、
「お兄ちゃんの煙のモコモコは小さいね。お母さんの煙のモコモコは大きいね」
と言ったので、今でも煙を見ると、モコモコだよって言います。私にしてみれば、消してしまいたい恐ろしい記憶です。
孫は今、元気に保育園に通っています。終わると、私達の家に来たり、婿の家に行ったりしています。じいじ、ばあばとなついてくると、本当にいじらしくて、ふびんで……。
たまに婿の居所をたずねるくらいで、親のことはあまり言いません。婿もケガがまだ治らず、家族を二人もなくしてしまって、気持ちに余裕がないせいで怒ったりするからなんでしょうか。お母さんとは絶対に言わないんです。こんなに幼くても、もういないのを理解しているんでしょうね。
あの年頃には外遊びが大事だってわかっていても、両親そろったお子さんと遊ばせるのは気がひけたり。これからも孫に関する悩みは尽きないでしょう。でも娘の忘れ形見ですし、婿は大変だし、私たち祖父母がしつけや教育などを引き受けようと考えています。そのためにも、がんばって働き続けようと思っています。

なんでうちだけ

私は仕事を持っていまして、主人が夜勤明けで帰ってくる日は、いつも玄関で入れ替わりになるんです。ところがあの震災の日は、家を出る時間になっても主人がまだ帰ってこなかったんです。今日はちょっと遅いなと思いましたけれど、そのまま仕事に行きまして、九時くらいに主人が大変だと会社に電話があったんです。動転しました。

主人は港で大型クレーンのオペレーターをしていました。クレーンに乗ったまま、揺れで倒れて下敷きになってしまったのです。翌日の午前二時くらいまで、二十時間近くはさまれたままの状態でした。すぐにでも近くに行きたかったのに、危険ということで止められました。代表の方が様子を見にいったのですが、やはり近づくことはできませんでした。

無線で連絡をとっても応答がない。そこにいるってわかっているのにそばに行けない。そういう気持ち、わかります？　歯がゆくて、いてもたってもいられないんですよ。

主人の会社は、出勤時間が朝、昼、夜の三交代制です。地震のあった日はたまたま夜勤明けの日で、あと一時間もすれば、クレーンから下りていたはずなのに。これも運命なんでしょうか。正直言って〝なんでうちだけ〟という気持ちになりましたよ。

夜勤に行ったままだったでしょ。だから朝になると帰ってきそうな感じがするんです。

「ただいま。気をつけて仕事に行ってくるんだぞ」
って。
一番寂しいのは、夕食の時でしょうか。昼出勤以外の日は、毎晩必ず家族四人でそろって食べていたんです。今じゃ毎晩、私と子供二人の三人です。
不思議なことに、主人は次男と同じ年のころ、やっぱり父親をなくしているのです。主人は男三人兄弟の真ん中の次男。大学進学をあきらめて就職しました。主人の母もそれから働きに出て、家族を支えるようになりました。私も同じ立場になってしまったわけです。どんなにつらかったか、今、身を持って理解できます。
主人は勉強したかった園芸を趣味にしていて、ランに凝っていたんですが、それも主人の死を悼むように十鉢ほど倒れていました。
お父さんの存在は大きいですね。主人なら、進路のことなど次男の相談にのってくれたと思うんです。私ではよくわからないことも多いですから。次男は性格がおとなしいので、主人を亡くしてからもこれといって変わった様子はないのですが、隠れて二階でハムスターを飼ってたんですよ。やっぱり寂しかったのでしょうね。

お兄ちゃんは大黒柱や

私と夫が住むアパートのすぐそばに、息子の家族が住んでいました。震災で、息子達の家は全壊し、一家全員家の下敷きになってしまったのです。

息子、孫の長男、次男は自力で脱出しましたが、嫁と孫の長女は中に取り残されました。長女の足が瓦礫の中に見えたので、近所の人達が協力し合って、何とか体を外に運び出してくれたのに、もう手遅れでした。息子もケガをして病院に行きました。

私達も建物の下敷きになってしまいまして、助かった孫達が救出に来てくれました。二人で私と夫をだき抱えて避難所まで連れていってくれたんです。私達を無事送り届けると、二人は自分達の家に急いで帰って行きました。

長女は見つかったのに、嫁が見つからない。自衛隊に頼んで捜してもらい、ようやく発見されたのは、二、三日過ぎていました。

息子も入院したと聞いたのですが、混乱していましたからね、どこの病院にいるのかわかるまでとても大変でした。近くにある病院をたずね、病室を一つ一つ見て回り、一人一人の顔を確認して、ようやく見つけることができたのです。

その後、避難所生活をしましたが、そこは年寄りには暮らしにくいものでしたね。当時病気

だった夫は、避難しているたくさんの人達の間を縫ってお手洗いに行くのが大変でした。皆が眠っているのを起こすようなこともあって、このままでは迷惑がかかると思い、しばらくの間親戚の家にお世話になりました。

その後は現在のアパートです。三月には夫も亡くなってしまい、今は孫達と暮らしています。息子は何度も手術を繰り返し、現在も入院中です。

一家を支えているのは孫の長男。震災にあった時にはすでに就職が決まっていて、今では息子に代わって経済面でも精神的な面でも中心です。次男も、お兄ちゃんがいなかったら、僕も今までやってこれなかったと言っています。

お兄ちゃんは私たち家族の大黒柱というわけです。

家事の苦労は案外あるものですね。中学生の次男は、学校へ持っていくお弁当に、お母さんは、もっとこうしてくれたなどと、文句を言います。母親の話をすると涙ぐんでしまうので、あまり口に出さないようにしています。本当は転校をしなくてはならなかったのですが、

「お母さんをなくして、その上また友だちまでいなくなるなんて、絶対に嫌だ」

と抵抗したため、特別に転校をしなくてよいように取り計らってもらいました。

でも、しばらくたって書いた作文に、母親のことなどを書きつらね、これからがんばりたいという前向きな決意の結びがあり、現実を見つめていこうという様子にほっとしています。

埋まったままで大いびき

銭湯を営業してまして、仕事柄、いろいろ後片づけが遅くまでかかり、さあ寝ようかといった矢先だったんです。ものすごい音と振動に、トラックでもぶつかってきたかと思ったくらいです。

夫と二人、立つこともできず、布団にしがみついていたら、何かが倒れてきたんです。まさかと思いましたが、風呂の煙突ですよ。根元からボキッと折れて、私達の寝ている部屋を直撃したんです。

思わず、大丈夫？　と叫んだら、返事があったんで、ああ無事だなとほっとしました。身動きひとつできない状態で、どのぐらいもがいていたかしら。でも、ああいう時には女の方が強いんでしょうか。私はもう死ぬ覚悟もできたんですが、夫の方は恐怖でパニックになってしまって。私が話しかけたり怒ったりしてなだめているうちに、どれくらい時間がたったのか、外で声がしたんです。助けがきたって、ほっとしたんです。

でもそれも束の間、急に夫が大いびきをかきだして、今度はこっちがパニックですよ。結局助け出されるころには、もう意識がありませんでした。脳卒中だったらしいんです。

長女が揺れのあと自力で脱出して、私達のことをご近所に知らせてくれたおかげでした。そ

の後もなにくれとご近所の方々には親身になってもらって、何よりの支えになっていただきました。人望の厚かった夫のおかげだと思ってます。住み着いてかれこれ、二十五年になりますが、遠くの親戚より近くの他人という言葉をしみじみと感じましたね。

余震がだいぶおさまった三月ごろ、皆さんに手伝っていただいて、荷物を掘り出しました。雨が降ったあとで、半ばあきらめていたんですが、着る物とアルバムだけはどうにか出せました。でも、もう泥だらけでね。まだつらくってアルバムは開いていないですよ。それに心残りなのが娘の振り袖です。もうきっと作ってあげられないだろうから、どうにかして出したかったんですけどね。

今は被災地から離れた場所で娘達と三人で暮らしています。夫の一周忌は、せめて彼の好きだった神戸で迎えてあげたいですよ。寝る時は娘達と固まって、枕を並べているんですが、もし今また地震が起きたら、この子達をどうやって守ったらいいんだろうって考え出すと、ちっとも眠れませんね。

ボランティアの皆さんには本当に、お世話になりました。一時的なものでなく、息の長いものになることを期待しています。世間の記憶が薄れていかないうちに、ボランティアという素晴らしいものの存続のためにマスコミもぜひ役に立ってほしいですね。私達も行政やボランティアに頼りすぎないで、できることは自分達で前向きにがんばらないとね。

一日も早く、元の神戸に

中学二年　M・S

阪神大震災が起こった時、家や学校がこれからどうなるのかという心配と、また地震が起こるんじゃないかという恐怖でいっぱいでした。

あれから九か月が過ぎ、毎日のように泣いていたお母さんにも、少し笑いが見られるようになり、今までとは比べものにならないほど暗かった家の中の雰囲気も、けっこう明るくなってきました。

それでも、食事をしている時などは、少しさびしさがあったりします。

休みに会いに行ったときのおばあちゃんは、それ以上に悲しそうでした。いつも元気で厳しいおばあちゃんが別人のように元気がなく、おばあちゃんが涙を流しているのを僕ははじめて見ました。それほど、お父さんのことが好きだったのです。

お父さんは真面目で、勉強を教えてくれたり相談にのってくれたり、いつも家族のことを心配してました。

お父さんとは何もしてないと思っていたけど、亡くなってから、いろんな思い出がうかんできます。

でも、このまま落ち込んでいるわけにもいきません。お父さんは、

作文集

「もっと勉強しろ、将来何になるか決めておけ」
と言っていました。
僕は今、クラブ活動には力を入れているけど勉強は手を抜きがちです。両立できるよう努力して、お母さんや兄弟に心配させることなく、ぜったい後悔しないよう堂々と胸を張り、常に前へ進み続けることを忘れたくないです。
でも、神戸に戻りたいという気持ちはあります。神戸は本当に住みやすいところでした。どうか、一日も早く、元どおりの神戸に戻ってほしいです。
お父さんもきっとそう願っていると思います。

オレはもうダメや

「お前は大丈夫か。オレはもうダメや」

それが最後でした。その後、もう夫の声は聞こえなくなってしまったんです。

突然の大きな揺れで、天井が落ちてきて、私と夫と娘は八十キロのタンスに足をはさまれ、身動き一つできないまま……。でも、夫の温かい手が私の手をしっかり握っていてくれたおかげで、ずっと安心していられたのに。なんとか誰かに助けてもらおうと、夫と一緒に気が遠くなりかけながらも、喉をカラカラにして叫び続けていたんです。まさか亡くなるとは……。

私が運ばれた病院では、被災したのは私だけで、周囲の人もいろいろ心配してくださったんですが、まだ何も話す気になれないんです。ひどいケガで重体だったんですが、夫の両親も気を使って、彼の死を知らせてくれなかったようです。

幼少の娘も父親の死を聞かされていますが、時々、

「パパはいつ帰ってくるの」

って、不思議そうに聞くんです。パパはもう死んじゃったのよ、と言っても、

「どうしてママは生きてるのに、パパはいないの」

公園で死んでしまったセミを見ても、

「あ、セミさんねんねしているよ」

パパもどこかで眠っていると思っているんでしょうかね。

娘のことを宝物のようにしていた夫が守ってくれたのか、娘は奇跡的に無傷だったんです。今は、夫の両親の家にお世話になっています。息子の面影を少しでも感じていたいという舅と姑の気持ちがひしひしとこちらにも伝わってくるんです。だからとてもよくしてもらってます。

これから、どうやって生きていこうかと真剣に考えたんですが、できれば、夫の作った会社を再建したいんです。友人と共同出資で設立してようやく軌道に乗り、まさにこれからというところでした。震災当時お世話になったその友人への恩返しの意味も込めて、夫の意志をかなえてあげたいんです。

娘は、当時より何だか一回りたくましくなったみたいに感じます。この子がいてくれて本当によかったって、心から思っています。家族三人で平凡に暮らせるっていう当たり前だと思っていた幸せが突然なくなって、まだ立ち直れるまでにはなっていませんが、娘のおかげでひとりぼっちじゃないんだって思えます。

めちゃめちゃにつぶれた家から、持ち出せたものは、アルバムとお金じゃ買えないものだけ。どうせなくなってしまう気がして。

少しずつ気持ちの整理がついたのか、やっと人前でも泣けるようになりました。

ああすればよかった、こうすれば助かった

一瞬でした。余裕も何もなく、いきなりガーンと突き上げられるような感じで、家が揺れたかと思うと、壁土がボロボロと落ちてきたんです。同じ一階で寝ていた妻が、キャーッと、叫んで私に抱きついてきました。私はとっさに妻に覆いかぶさり、腕を立て膝を曲げながら、かばおうとしたんですが、そのあと天井の梁がドッと私の肩から背中にかけて崩れ落ちて、私達は、そのまま生き埋めになっていました。

三時間後、近所の人達に掘り起こされたときには、もう、妻はピクリとも動きませんでした。掘り出されるまでの間ずっと、二階で寝ていて助かった三人の子供達が、がんばれ、がんばれと声をかけていたんです。そしてすぐ、娘は妻に人工呼吸や心臓マッサージをほどこしたんですが、やはりダメでした。圧迫死でしたよ。

妻の上で、腕を立てている姿勢でいるときはまだ息もあったのに……。三時間、ずっとあの姿勢でいたから、妻の葬式の時も人の手を借りないと立てなくなっていました。肩にも着ていた服の縫い目が食い込んで、一週間くらい痕が残っていました。

今でも、私が覆いかぶさらなければ助かったのではと考えてしまいます。あの時すぐ二階に上がっていれば、ああすればよかった、こうすれば……、きりがないんですけどね。考えない

ではいられません。

息子もあの日以来、かなり自分を責めているようです。いつもならその時間、教会に行っていない母に、たまたま自分が大学の用事で、六時に起こしてと頼んだばっかりに家にいたって。今、息子は妻の結婚指輪を首にぶら下げてますよ。パンパンにはれていた妻の指から抜けなくて、火葬してから取ったんです。あの日以来ぴたりと地震のことは話しません。

私達の家も一階は完全につぶれてしまって、一週間ぐらいたってから、やっと二階にあったものを持ち出しました。娘の職場の人達が三、四人来てくれて、親戚の家まで運び入れるのを手伝ってくれたんです。

来年あたりには、以前住んでいた借家のあった土地に、新しく家が建つようなんで、残った家族と入れればと思っています。私もあと五年で定年なんで、その後どうなるのかなあって考え出すと不安でね。

六キロやせました。それにやっぱり余裕がないのか、怒りっぽくなったって、よく言われます。気長に気長にって思ってるんですがね。物事にも熱中できなくなったというか、根気がなくなってきたというか。妻がいてくれたら……と思います。

息子とじゃれ合いみたいなけんかをしょっちゅうしていて、いつもコロコロ明るくてね。大切な人でしたよ。いなくなって、身にしみて感じています。

母との約束を果たしたい

わたしは今、九州の田舎町で祖母と二人で暮らしています。あれから九カ月がたったけど、今もあの日のことは思い出したくない、話したくないという気持ちでいっぱいです。震災前は事情により母と二人、木造二階建てアパートの一階で生活していました。

母は地震時、わたしの弁当を作っていたようです。わたしは寝ていて、激しい揺れを感じた瞬間、家具などで体が動かなくなりました。母の名前を呼び続けましたが、返答はありませんでした。自力で押入れとベランダの間から外へはい出ました。母は結局四日後、自衛隊の人達によって運び出されましたが、柱の下敷きになり即死だったということです。

その間のことは、あまりよく思い出せません。神戸に父がいるので一緒に暮らせれば一番いいのですが、やはり事情により無理です。それが悔やまれてなりません。

やむなく、震災一カ月後にこちらへやってきました。ここは母の実家ですが、ともかく習慣も言葉（方言）も違いすぎて、人と話すことが億劫になってしまいました。

何でもないようなことですが、例えば、クラスのみんなが休み時間に和気あいあいとしている時にその中に入れない、一緒に笑えない、そんなことがよくあり、自分の居場所がないような気持ちになりました。

そして三カ月がたった頃、我慢ができなくなり、父に神戸に帰りたいと電話で言いました。父は、もう少ししたらお前のところに行くからがんばれ、と言ってくれましたが、いまだ会ってはいません。

祖母は田舎から出たことがないので、わたしの感覚は理解できないようです。悩みごとなんて相談できません。お互いのことを理解できるにはまだまだ時間がかかりそうです。

近所にはたくさん、親戚やいとこがいて、私のことを優しくいたわってくれます。でも、突然、はじめて会った人に親戚だよと言われても、心を開くことはなかなかできません。

今一番の楽しみは、神戸の親友達七人との文通です。毎日、郵便箱をのぞくのが習慣になりました。電話で直接話せれば精神的にも楽になると思うのですが、お金がかかりできません。

夏になる前からテニス部や英会話のサークルに入り、モヤモヤとした気分を晴らしています。大学は神戸の学校と思っていますが、受験勉強もままならないのが現状です。

流れ星がよく見え、静かな海がある生活は、母や神戸のことを思し出し、本当につらいのです。

早く自立したいと思っています。炊事、洗濯、掃除などは自分でやっています。また、将来の目標は、介護福祉士になることです。昨年、神戸市の老人福祉施設にボランティア活動で行き、ともに生きる喜びを感じました。母との約束を果たしたいんです。

三本の矢

ただならない揺れに、主人を起こした時には、テレビや家具が飛び上がっていました。一階の私は気がついたら一ミリも動くことができずに埋まっていて。口は半分ふさがっていましたが、半分は隙間がありましたので、かろうじて息をしていました。両手は伸ばしたままで、だんだん痺れてきて、そのうち感覚がなくなりました。

結局、近所の人の手によって五時間後に救出され、病院に運ばれました。主人は落ちてきた梁の下敷きになって亡くなっていたそうです。

二階で寝ていた高校生の次男はケガもなく、自力で脱出できました。奇跡的です。

病院は器具が全部壊れ、野戦病院のように、みんな廊下に寝かされていました。私は足を骨折し、手は痺れて動きません。子ども達が、私の手をさすってくれているんですが、そのさすり方で子どもの気持ちがわかるんですよ。

次男は神経を復活させようと、ごしごしと気合が入っている。下宿先から駆けつけた長男はかろうじて手が動いているって感じ。主人の遺体や壊れた家を見に行ったりと、この子はまだ状況が飲み込めなくて呆然としているんだなと思ってね。

私の入院中、次男は学校のことなどいろいろ話してくれました。実は次男は地震の前までは

反抗期だったんです。主人が厳格な人で、自己主張の強い次男は反発していました。父親を亡くしたことでどうなるか、とても心配していました。それが地震のあったたった一日で大人になったような感じです。親を保護する立場になったっていうか、私に心配かけないようにという気持ちでしょうね。病院に着くまでの間、私を笑わせようと一生懸命考えてたみたいですよ。でもずいぶん長い間、眠れないと言っていました。

私もそうでしたね。夜、恐いから眠れないんですよ。物がぱっと飛んでくる夢を見て飛び起きることが時々ありました。みんなが起きていると安心して眠れるんです。

七月に退院してから関東に引っ越しました。次男は高校の転校を嫌がりました。勉強意欲がわかず、半年間、何も勉強しなかったので、周りについてゆけず、髪を染めたり、変なかっこうをするんです。お母さんは嫌だと言うと反発します。

五カ月半、私の看病や親戚の家での生活で、言いたいことも言えずにいたフラストレーションでしょうね。人には言えない、いろいろなことがあったようです。

それでも、こんな異常な体験をしたということで、子どもは精神的にかなり大人になったと思います。家族一緒になった時には兄弟げんかもありましたけど、三人は力が同じだと思って、三本の矢でやっていこうと私は言いました。

二人ともずいぶんたくましくなってくれましたね。

大人にならなあかん

高校一年　内之宮寿裕

地震が起こった時に目が覚めた僕は、天井がゆれているのを眺めていた。すぐにお母さんの声が聞こえてきた。「寿裕ーっ」と、叫ぶような声だった。その瞬間にメキメキという音がしてタンスが倒れてきた。僕は気を失っていた。しばらくして、弟の泣き声が聞こえてきた。ああ、こいつ無事やったんや、よかったなあと思って声をかけてやったら落ちついたようだった。

兄弟四人全員無事だったけど、母さんは十一時を過ぎても発見されない。十七日に父さんは九州に行っていて、家にいなかった。近所の人の見ている中で、お母さんは救急車で運ばれた。警察の人に胸部圧迫でほとんど即死だったと聞かされた。覚悟していたけど、やっぱりつらかった。

今、僕等家族五人で尼崎の仮設住宅に住んでいる。最初は何となく淋しかったけど、今は仮設に住んでる他の人とも仲良くなってお父さんも頑張ってる。たまに手伝いをすると、母さんはずっと一人でやってたんやなあと思う。なのに面倒くさがる自分が情けなくて笑えてくる。もっと大人にならなあかんと心に誓う。

最後に母さんへ。怒られたこと、あんまり覚えてないけど、これからは父さんに怒られないよう頑張るわ。

作文集

夢に笑ってでてきてね

中学一年　中山　舞

私は地震があった日、学校のスキーキャンプでハチブセ高原にいました。朝、ものすごくゆれて、先生が震源地は神戸やあ！　と言ったけど、神戸の街があんなに壊れているとは思ってもいませんでした。でも、帰りのバスでパン屋さんがくれるはずもないおにぎりをくれた時に、これが最後のご飯になるかもしれんぞと先生がいったので驚いてしまいました。

お父さんが死んでしまったという知らせを聞いたのは、地震から一週間たった二十四日。その次の日、お母さんとお姉ちゃんと私の三人で、お父さんが亡くなったお店に行きました。そこは長田区の特に激しく燃えたところで一面焼野原になっていました。お店の場所の確認がとれてから、お父さんの骨を拾いました。

お父さん、天国で元気にしていますか。今はお姉ちゃんのだんなさんと、四人楽しくくらしています。地震の後、恐い夢を何度か見たよ。けど、お父さんは一度も出てきてくれない。地震の前、焼肉食べに行こうって電話くれたね。でも、私は行かなかった。今とてもくやんでいます。お姉ちゃん達は、来年は今の所をでていきます。お父さん、きっと夢の中にでてきてね。笑ってでてきてください。

無惨な主人と息子の姿

震災で主人と二十歳前の次男を亡くしました。文化住宅の一階と二階に家族六人が分かれて寝ていたんです。二人は一階にいて、崩れた家の下敷きになりました。夫は、頭に大型テレビが落ちたようです。死体は目玉が飛び出て、顔が変形していました。次男は、柱が腹部に倒れてきて、腹の肉が削られて骨が見えていました。

一階には長男もいて、三人が崩れた家に閉じ込められました。息子二人の声は聞こえるのですが、主人の声はありません。なんとか助け出そうと、二階の床をはがしたりしたのですが、素人ではどうにもなりません。次男の「グゥー」という苦しそうな声がして、もう助からないなと感じました。そのうち長男の声しか聞こえなくなりました。でも、とにかく夫と次男が生きていることを信じていました。

午後二時すぎに自衛隊が来て、ちゃんと救出してあげるから、と言われて安心しました。

長男は無事に助け出されたのですが、亡くなった主人の手には、電話の受話器が握られていました。一階と二階の両方に電話を引いていたので、二階の私たちを心配して、電話をかけようとしたのでしょう。早く逃げ出せばよかったのに、と思います。

二階には私と中学生の長女、五歳の三男がいました。縦に揺れて体が宙に浮くような感じが

し、床がドスンと落ちました。タンスが倒れてきたのですが、コタツにひっかかり、その隙間で偶然助かりました。三人とも無事に救出されました。

今住んでいるマンションは、震災前に契約を済ませて、完成を待っていたものです。本当なら今頃は、家族そろって新居で幸せに暮らしているはずでした。これからという時だったのに、残念でなりません。私は小六のときに父親を交通事故で亡くしています。何も悪いことをしていないのに、どうして、またこんな目に遭わなければならないのでしょうか。

長男は、父親の後を継いで、電気工事の仕事をしています。震災前から主人と一緒に仕事をしていたのですが、仕事ぶりは、あまりやる気がなかったようでした。でも、父親の死で、人が変わったように一生懸命に働いています。その収入と亡くなった二人の生命保険とで、ぜいたくをしなければ何とか食べていけそうです。

今はあまり外に出かけたりする元気もなく、ほとんど一日家の中にいます。遊びにも連れていけず、五歳の三男がかわいそうです。ただ、できるだけ一緒にいてあげたいと思っています。

夫婦が歳をとってから生まれた子で、実は生むか生むまいか、ずいぶん悩んだのですが、今になってみれば、この子がいてよかったと思います。気持ちは震災からずっと落ち込んでいるのですが、子育てが今の私の唯一の支えです。

七カ月の子の恐怖体験

夕べもですね。真夜中ですわ。一歳四カ月の孫がムクッと立ちあがって、大声で泣き叫ぶんです。どんなにあやしてもやめんのです。家内が、外に連れていって、寒いから、ガウンを着せてね。三十分もすると何とかおさまって……。でも、ふとんに寝かせると、また泣きだすんですわ。私も、二時、三時になっても眠れん。この前は、五日間もひどい夜泣きが続いて、家内はもうフラフラでした。私たち還暦を過ぎた年寄りには、寝不足が一番こたえますな。

孫は、玄関の玉すだれを引っ張ってよく遊ぶんですが、それが床に落ちて、大きな音をたてると頭をかかえてちぢこまって、ものすごい声で泣くんですわ。おびえてるというか、恐いんですかね。たった七カ月の子にも震災の時の恐怖が忘れられんのかなあと思うんですが……。もう少し大きくなったら医者に診てもらおうと思っています。

私の一人息子と嫁とこの子の一歳上のお姉ちゃん、いっぺんに三人も亡くしました。息子は、マンションを買ったんですが、嫁の実家の二階の賃貸アパートが空いたので、去年の十一月に引っ越したばかりだったんです。三階建てのその家は全壊で、その日、三階で寝ていたこの子だけが助かったのです。神様がこの子だけは残してくれたんですかねえ。家内が言うんです。

「この子も失っていたら、私はどうなっとったかわからん」

一月十九日に鉄道が通ったので、ここから現地に行きました。息子の会社の人たちが、駅に自転車五台を用意してくれたり、本当によくしてくれました。電車なら十分のところを二時間半かかりました。その遺体安置所には三百体以上あったですかねえ。でもお棺がないんですわ。かわいそうでしたね。二十三日に火葬して、この子を連れて帰ろうとしましたけど、自転車でおぶって帰るのはとても無理なので嫁のお姉さんに預けました。

二月七日に、この子を連れてきました。大阪駅まで泣いて泣いて泣きやみませんでした。この家に着いたら、また泣いて泣いて……。これからどうなることだろうと思いましたよ。

保育園に四月から通い始めました。平日は、朝九時から夕方四時まで、土曜日は昼まで面倒をみてくれるので、家内はその間に用事を済ませることができて助かっています。この前の運動会には、私も家内も参加して楽しいひとときでした。

私は今も働いていますが、リウマチで身体障害六級なんで体のことが少し心配です。

孫には、私たちのことをお父さん、お母さんと呼ばせたいと思っとるんです。

以前はこの子の成人式までは長生きせんと、と家内と話していましたが、この頃は、この子の嫁さんを見るまでは、二十五歳ぐらいかな、などと話します。面倒をみるうちに欲が出てきました。その頃、私は米寿を超えてますね。

弟を進学させたい

震災前は、私と母と弟と三人で暮らしていました。地震の時、私は二階に、母と弟は一階に寝ていました。家がつぶれていました。

弟は無事助け出しましたが、圧迫のため足の感覚はありませんでした。その後なかなか感覚が戻らないので入院しました。母は圧迫死でした。警察署に遺体を安置して、一月下旬に葬儀をしました。お墓はまだ建てていないので、遺骨は近くのお寺に預けてあります。

関東に姉が住んでいましたので、姉を頼って三月に引っ越してきました。

神戸から遠く離れているので、広報などの情報が届くのが遅くて、葬祭費の支給も間に合いませんでした。市役所へ電話してみても締切りだからと言われました。広報を出すのも葬祭費の支給をするのも市役所なので、何とかならないのかと思いました。

仮設住宅申込みの時も、弟が足をケガしているということで、病人ケガ人のいる家庭とみなされて入居できませんでした。もともと母子家庭で母も亡くなったので、私としては入居できるかなと思っていました。児童扶養手当の支給も、書類が市から県に回っているらしくて、時間がかかりましたし、市役所の職員に聞いても、

「上の方針が決まらないから、どうにも答えようがない」

と言われました。こっちも生活がかかっていましたから腹が立ちました。今でも児童扶養手当の支給がないんです。

現在は、私のアルバイトで何とか生活しているような状態です。アルバイトで外に出ているので弟のことが気になりますし、毎日電話をしないと心配です。家計はトントンですし、今住んでいるところも来年一月末には出なくてはなりません。期限付きのため二月からの契約更新ができません。今年中に何とかしなければと思っています。

神戸を離れていますので、住まいの場所にはあまりこだわっていませんが、周辺の市町村で被災者の特別な枠のあるところを中心に住宅を探していますが、なかなか見つからず、苦労しています。

今年、大学を卒業しましたが、就職先がありません。特に就職が厳しくて大変です。当然私の就職先によって住居も変わりますし、弟の転校や将来の志望高校にも影響が出ます。

本当にかわいそうなのは弟です。私がいない間も掃除や洗濯をやってくれますから、受験勉強も途切れ途切れになってしまって申し訳なく思っています。弟も大学に進学したいようですし、私も高校だけでは終わってほしくありませんからがんばってほしいです。

とにかく、私の就職が決まらないと話になりませんね。

母の死をどう伝えたらいいのか

現在は私の実家の九州で、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に三人の子ども達と住んでいます。妻を亡くし、今はおばあちゃんが家事すべてをやってくれています。しかし高血圧なので、週に一回は町のヘルパーさんに来てもらっています。私も仕事を探さなくてはと、一週間に三、四日は職業安定所に行きますが、この田舎ですから市内まで行かないと仕事もないんです。

一番下の坊主はまだ小学校前で、いつも私かおばあちゃんにべったりくっついて離れません。母親と同じ病院に入院をしていて、この子だけは退院したんだけれども、母親は亡くなったんです。でも、この子はまだ母親が病院にいて、もうすぐ退院できると思っているんです。

「お父さん早く病院にお見舞いに行こうよ」

と言われる時は、何と返事してよいかわからず、上の二人のお姉ちゃんは小学生ですが、お母さんの死を気づかせまいと懸命になっている姿がいじらしくて……。私自身も耐えきれず、いつ、どういう時にこの子に伝えようか、毎日悩んでます。

下の子は震災でのケガの後遺症があり、今も一週間に一回は病院でリハビリしています。少しずつ回復はしてるんですが、精神的部分の〝後遺症〟もあるんやないかと思っています。仕

事が見つかり働き出すと、一緒に過ごす時間も減りますから、今のうちにできるだけ三人の子ども達と話したり、遊んだりしてあげたいと思っています。

お姉ちゃん二人は震災後すぐに関西の小学校に行きましたが、母親が亡くなったことを学校全体が知っていて、いつも複雑な顔をしていました。そういう目で見られるのがとてもいやだったんでしょう。今の九州の学校に移ってから、すぐに溶け込んで、近所の人達からもとてもよくしてもらってます。なんとか高校まではと思いますが、そんな先のことなんか見通しも立ちません。子ども達も九州弁や学校の授業に慣れるのに毎日必死です。

妻が亡くなる前から家族五人でディズニーランドに行こうと積立をしていました。でも震災でその積立金も失い、夢もなくなりました。

途方に暮れていたところに、あしながさんから子どもたちへの激励金と、なんとディズニーランドへの招待状までいただいて……。天国の妻があしなが育英会を通してくれた贈り物だと思い、行かせてもらいました。子ども達も大喜び、本当にうれしかったです。

今、地元の遺児の大学生達が子どもたちの遊び相手に来てくれてます。三人とも来るのをとっても楽しみにしていて、帰る時も、

「お金をあげるから帰らないで」

とダダまでこねるんです。ずっとおつきあいしていきたいです。ほんとありがたい……。

声も聞こえないまま

高校一年　吉田ひろみ

あの十七日に起きた地震は、私たちの生活の中ではありえないことだと思っていた。部屋の荷物にうもれて動けなかったとき、本当に怖かった。

お母さんの声だけが耳に残る。お父さんは、前日もちゃんと顔を見ていないのに、いつ息絶えてしまったのか、声も聞こえなかった。

私は、なぜか次女だからという気持ちで、泣くこともほんの少し我慢してしまった。最後には泣いてしまったけど……。両親はいなくなったけど、あれから友達は増えたし、私の性格も生活も一見あまり変わらないような気がする。そう思いたい。

けど、やっぱり気楽に話せる人は、お母さんが一番。お父さんは怒ってばかりいたけど、まわりの人がみんな、お父さんのことを「やさしい人」と言っていたように、本当はとってもやさしいお父さんだったと思う。

突然死んでしまったけど、二人はこれから先もずっと私の両親だ。

私のお父さんとお母さんとして、ずっと私の心の中で生き続けさせる。

きっと、きっと。

作文集

たった一枚の写真

大学二年　吉田美保

成人式の夜、
私の振り袖姿を見れなかった父は、
「お祝いに何か買ったらなあかんなぁ」と言っていた。
母とは「水曜日は買い物行くから仕事休んでなぁ」と約束をしていた。
一月十二日に調理実習で作ったチキンシチューがおいしかったから、
私は次の週の土曜日にバイトを休んで、父と母に味わってもらおうと思っていた。
しかし、一月十七日、どの計画もはたせぬまま、両親とも逝ってしまった。
思い出の品をほとんど取り出せないまま、家もかたづけられてしまった。
写真をこまめに撮る父だったが、気がついたときは、
家族五人そろって撮った写真は、私が小学六年のころのたった一枚だけだった。
今になってとても残念に思う。
楽しみにしていた計画も思い出も、
そして父と母の命も、地震がすべて奪っていってしまった。
涙がとまらない。

治らなくていい、パパとママのとこに行く

息子と嫁は圧死し、孫娘二人が奇跡的に助かりました。上の孫を私たち夫婦がみて、下の子を嫁の実家で預かっています。よく行き来はしていますが、実際に二人の小学生の面倒をみるのは大変です。二人だけになった時、変な考えをおこさないかと心配しています。二人にしておくと地震を思い出して泣いています。できるだけそばについているようにしています。

三月に風邪をひいたとき、上の子は病院の先生に、

「パパとママのところに行くから、治らなくてもいい」

と言うんです。少し内向的なのでショックを受けて、よけいものを言わなかったです。

先生に診察してもらいましたら、震災の後遺症でしょうから、たぶん大丈夫でしょう、と言われました。

学校は嫌がらずにいってますが、勉強が全然ダメです。本人は、地震でやる気がなくなったんや、と言ってます。被災地の子どもはみんな地震の影響を受けてますけど、やる気がないのは心配です。半分は、しようがないとも思っているんですけど。

地震の時、孫は二人とも二時間半瓦礫に閉じ込められていました。二人だけで暗い中にいたと思うと今でも不憫に思います。地震から三日ぐらいして孫に聞いてみましたら、家族四人と

も二階で寝ていたそうです。前日に二段ベットを買ってもらって、それが丈夫で隙間ができ、暗い中、二人で話してたって。下の子が、おトイレに行きたいって言ったので、そこでしなさいと言ったとか、パパとママを二回ほど呼んだけど返事がなくて、どうしたんかなあとか、そんなことを話していたそうです。

上の子が最近読んだ本に、そういう時はあまり体力を消耗しないようにじっとしておいた方がいいと、書いてあるのを思い出して助けを呼んだりもしなかったそうなんです。

「おばあちゃんはパパとママが病院へ行ったと言ったけど、私はあの時死んだんとちがうんかなあって思ったのよ」

って上の子に言われました。

私は息子の家からは何も拾う気がなかったんですが、孫たちはランドセルやエンピツ、ノートなどちょこちょこ拾ってきました。ハンカチを見つけて、

「これ私が地震のときに涙を拭いたハンカチ」

とか言ってました。私が泣いていると、おばあちゃん、泣かないでって言うから、この子もつらいのに私が悲しんだらあかんと思ってね。

下の子は、私は生まれてから八年間しかパパママと一緒にいられなかったって言うんですよ。

殺すんか、助けるんか

八月に改築したばかりの文化住宅でしたが、ペチャンコになってしまって、娘も上の孫も即死でした。娘の婿はぐったりしてまして、病院に連れて行きました。病院も大変で、混乱していたし、物も薬もありませんでした。死にかかっている人が大勢ゴロンゴロンしていました。

二日目に私の息子が、婿を引き受けてくれる被災していない町の病院を探してきたんです。ところが先生は、助からない、途中で死ぬと言うんです。

「義兄(にい)ちゃん殺すのか助けるのか、どっちや」

と、息子が詰めよるんです。

「俺が今から連れていく。途中で死んでも責任ないで」

私は祈りましたよ。神様仏様、何とか病院に着くまでは守ってくださいって。その時は山越えて六時間かかりました。

「どの道を通ったか、無我夢中でわからない。病院で診てくれなかったらどないしようと思った。義兄ちゃんが死ぬことと病院が待っててくれるのと、僕には二つの苦しみがあった。病院に着いて、先生と看護婦さんが十人出てきてくれた時には失神したよ」

そのかいあって婿は一命を取り留めましたが、足のケガで今でも病院に通っています。仕事

に復帰する見通しはたっていません。入院している時に泣きながら一緒に住んでくれと言われたことがありました。歩けるかどうかもわからなかったんですから不安だったんでしょう。今は別々に仮設に住んでいます。少しでも自分で生活してきたら自信がついてきてるようです。

下の孫は保育園に入ったばかり。まっすぐ育てられるか、という気持ちでいっぱいです。避難所では愛想をふりまいていましたが、最近は泣いたり熱を出したり。

「そんなに泣くと仮設を追い出されるよ」

とあやすのですが、よけい泣くので、私の主人が夜中まで車に乗せて寝かしつけるんです。

仮設の屋根はトタンで、カラスが止まる音がボーンと響くんです。孫は、

「今のは地震じゃないか」

って聞くんです。朝起きると、

「今日、天気いい？」

って私達を起こします。天気がいいと神様が守ってくれて、保育園でお遊びできるから楽しいんだそうです。

お母さんぐらいの女の人を見てもだめです。急に甘えたり泣きだしたり。だから、できれば婿には再婚してほしいと思ってるんです。不謹慎ですかねえ。

すべてを投げ出したい

主人が屋根の土砂に埋もれて亡くなりました。家は崩れましたが、私と四人の子どもは無事で、大きなケガもありませんでした。

今、子ども達のことが気がかりでなりません。小学校六年の長男はそうでもないんですが、五年の次男はかなりストレスがたまっているようです。父親の話を特に避けています。きっとお父さん子だったからだと思います。いつもそばにいて、よく一緒にお風呂に入ったり、夫の食器を使って食事をすることが大好きでしたから。

小学校三年生の長女は地震の前日に夫を誘って一緒の部屋で一緒の布団で寝ました。

「お母さんも一緒に寝に行こ」

という声を今もよく覚えています。だからかなりのショックを受けたようです。長女は地震後すぐに目を覚まし、とっさにうつ伏せになり、布団をかぶったので助かりました。

自分は助かり、隣で寝ていた父親が死んだのですから、しばらくはほとんど口をきかず、元気もなく落ち込んでいました。四月に学校が通常どおり再開され、少しずつ元気を取り戻してくれているのが救いです。幼稚園の時に仲の良かった子と同じクラスになれたのが良かったみたいです。

次女は事の大きささえ理解していません。でも保育園への通園途中で商店街や普通の家の前を通る時に、壊れた家をシャベルカーが噛んでいくでしょう。それを見て、

「ああ、壊れちゃったねえ」

とつぶやいているんで、小さい目にはあまりにも刺激が強い光景ですから、その記憶が将来どのように残っていくのか、不安に思います。

次女だけでなく、四人とも思春期になった時、地震の影響がどのように出てくるのか心配です。夫がいないというのが、子育ての面もそうですが、実質的な面でも大変だと感じています。

自営業ですので、いろいろとしなければならないことが多く、一時期すべてを投げ出したくなりました。でも家族五人が路頭に迷うことになりますから、今日まで必死にやってきました。

「こんなときドラえもんがいてくれたら〝どこでもドア〟でどっかに逃げ出せるのにね」

ある日、こんなことを子どもに話しかけてしまいました。

ボランティアの方には感謝しています。あしなが育英会の大学生に家具の移動を手伝ってもらいました。同じ方が幾度か来てくださり、親しみを感じるようになりました。

子どもたちも優しいお兄さんお姉さんができたと喜んでいます。これからも継続的にお付き合いさせていただきたく思っています。やはり同じように父親がいない立場の人からの子どもの見方と、そうでない人との見方は違いますものね。

僕らが一緒なのを忘れないで

長男がバイトに出ていた未明のこと。いつになくノラ猫が騒いでいるような気がして、ふと目が覚めました。次の瞬間、「グラッ」と来て「ドーン」という衝撃とともに二階が崩れてきました。必死で呼びかけても夫は全然起きてくれない。その時、顔にさあっと風が当たったんです。もう無我夢中で風の吹いてくる方へはい出ていきました。

長男がバイト先から戻ってきて、一生懸命、瓦礫の中から夫を救い出してくれました。発見が早かったので病院で手当てもしてもらえたんですけどね。外傷もなく安らかな顔だったところを見ると、地震のショックで心臓が止まっちゃったんでしょうか。本当に眠っているみたいでした。その姿を見て、息子たちも涙をこらえきれなかったようです。でも、後にも先にもこの時だけだった。子ども達が泣いたのはね。

それにひきかえ、私ときたら親戚や知人に頼ることばかり考えていてね。「被災者」という言葉にどっぷり漬かって、ひがみ根性丸出しでイライラ、メソメソの毎日だった。舅、姑ともつまらないことでいがみ合ってしまったり。子ども達の目にもさぞ情けない母親に映っていたんでしょうね。で、しばらくして、長男に言われたんです。

「今は泣いてもいいけど、ずるずる泣き暮らすのはやめてくれ」

「なぜこんな時にきついことを言うの」
もう悔しくて、涙があふれて止まらなくて。
「言い方が悪かったらあやまるけど、もっとしっかりしてほしい。こんなことでお母さんが、いや、ぼくたち家族がダメになるのはいやなんだ」
「どうやって立ち直ったらいいの。教えてちょうだい」
「自力で立ち直ってくれよ。お母さんはこの家の中でいちばんしっかりしてなきゃいけない人なんだから。でも、ぼくたちが一緒だということだけは忘れないで」
当時はなかなか素直に聞き入れることができなかったけれど、その日から少しずつ前向きな考え方ができるようになってきたようです。
その頃はお金に対してもどんどん臆病になっていました。ムダづかいしちゃいけない。生活に必要な物だけを買うこと。自分を追いつめて心まで貧しくしてました。でも、五月の陽気に誘われて、思い切って大好きな植木を一鉢買いました。これも心にゆとりが出てきた証拠かな、と思っています。
住まいは、長男が、みんながんばっているところだからこそ、ぼくらもがんばれるんだと言い張ったので神戸にいます。

父の命とひきかえに

浪人生　山内大輔

ある日突然、予想もしなかった大地震が起き、自分の家族を襲った。
五人家族のうち、だれが欠けてもいけないはずなのに、
父が帰らぬ人となってしまった。
しばらくは何が起きているのか、
夢の中のことだと思わずにはいられなかった。
近所の人たちに手伝ってもらい、母や妹らを助け出せた。
父だけは、引き出されたが息をしておらず、だめだと分かった。
一瞬、頭の中が真っ白になり泣き崩れるしかなかった。
葬式が終わって、
今度は自分たちが生きていかなければと思い、父の分まで生きようと誓った。
地震前までは、自分は情けなかったが、
父を亡くし、そんな自分がだいぶ変わったような気がする。
父が自分の命とひきかえに、私を強くしてくれたにちがいない。

作文集

地震で変わった価値観

高校一年　嶺　綾

あの「兵庫県南部地震」を体験し、これまでの自分がとても情けなく思えます。今までの私は、いつも自分勝手なくせに、すぐ他人まかせにしてしまうところがとても多かったからです。

それに、私はすぐに「人は人、自分は自分」と考え、他人に振り回されるのは嫌いと、よく思っていました。

しかし、今回の地震で、私は数多くの人たちに励まされ助けてもらい、人の心の暖かさを身にしみて感じました。

そして、もし、みながみな「自分は自分、人は人」といった考え方をしていたら、自分はどうなっていたのか想像するだけでもゾッとします。私は、今回の地震によって、自分の中の価値観が大きく変わったような気がします。

何も返すことができなかった

妻の死因は診断書によると「震災のストレスによる急性心不全」です。あの地震から三週間後のことでした。

私たちが住んでいた官舎は、それほど被害がなかったこともあり、近隣の家をなくした人達やその親戚の人達の避難所として使っていただくことにしたんです。

私は仕事上、責任者として震災後すぐに仕事に行かなければならない立場で、妻は私の代理として、外部からの問い合わせや官舎内のことなど、すべて仕切らざるを得ませんでした。

朝は早くから炊き出しをし、朝食を出し、昼間は昼間で、水道はいつ治るのかとか、救援物資はいつ来るのかとか、なんでも妻に問い合わせてくる。さらに夜中も、やっと通じたと電話が寝る間もなくしょっちゅうかかってくる。

とうとう震災から一週間後、妻は眠れなくなって、近くのお医者さんに睡眠促進剤をもらうようになりました。それでも夜、電話がかかってくると目を覚ますので、このままではダメだと、妻の実家に連れて帰ることにしたんです。私の実家には受験を控えた息子を預かってもらっていたので、妻も勉強のじゃまになりたくないからということだったし、遠かったんですが、妻のほうの実家に帰したんです。

十日ほどして、やっと私も休める日ができたものですから、そっちに行くよと電話をしたら、「あなたも疲れてるでしょう。遠いし、しんどくなるだけだからこなくてもいいよ」

翌朝、起きて二、三歩歩いて意識を失って、近くの病院に運ばれたそうです。もうダメだと先生が言っているという連絡を受けて、取るものもとりあえず、妻の実家に向かいました。とにかく苦労ばかりかけたと、感謝の気持ちを伝えたかったんです。なんとか私がそっちに着くまでもってくれとひたすら祈りながら急ぎました。

十二時五十八分、意識が戻らないまま、逝ってしまいました。

本当に、よくつくしてくれた妻でした。私の仕事の関係で八回も転勤をし、ひどいときは出産間近の引っ越しもありました。死んだあとに見つけたノートには、私の両親から長男の嫁としてああしろこうしろと言われたことを、一つ残らずメモしてありました。

やっと子どもも大きくなり、これからは少し楽をさせてやれる、夫婦そろってやっと青春を楽しめるようになるなと言っていた矢先です。

何一つ、返してやることができませんでした。本当に悔しい。

生きてさえいてくれたらええのに

ようやく発見した祖母と妻を、近所の人達が一緒にかついで、近くの病院に運んでくれました。でも、病院の中もごった返していて、患者やら、死んだ人が道路まではみだしていました。外から見て傷のない人は診てもらえないんです。それであばら骨や助骨が折れてて痛がっている祖母も、何もしてもらえず帰されました。

妻ももう死んでるからと病院には置いてもらえず、体育館に行かされました。

あんなにいい嫁さんはいないと、田舎の兄弟からも言われるほどでした。人からもすごく好かれるタイプでね。私が会社のことで愚痴を言うと、

「そんなこと言うたらいかん。人の悪口は言うもんじゃない」

なんて、言うておりましたわ。

今一番思うことは、働けなくてもいいから、生きていてくれるだけで、よかったのにということです。社内の人は私に、くよくよしたって帰ってこないとか言います。でも、大切な人を亡くした人にしかこの気持ちはわからんと私は言うんです。

もう、ただただ、夢で会える妻がいるだけですわ。

私より不幸な人、おらんかな

夫は肝臓が悪く、震災の四日前に手術をして入院中でした。激しく揺れた後、病院からは、無事だと連絡がありました。なのに、その日の夕方になって突然意識がなくなり、翌日亡くなってしまいました。医者は地震のショックでしょうと言うけれど、納得いきませんでした。どういう状態だったのかはっきり教えてほしかったんですが、病院は責任を恐れてか、そのあたりのことを説明してくれませんでした。

子どもとは話をしますが、夫と話していたような話ではないので楽しくありません。大人の話ができず、絶えず孤独を感じます。思うように言える人、キャッチしてくれる人がいないんです。

仕事をしていると気持ちが集中できるからまだいいんですが、買い物をしているときや電車に乗っているときなど、あの日のことをふと思い出します。

震災の直後、一番落ち込んでいたときはよく新聞などを見て、何でもいいから自分よりも不幸な人を捜していましたね。恥ずかしいことですけど、自分より不幸な人がいるということで、何か変な安心感みたいなものがあったんです。

前向いていかな、しゃあない

トイレに起きたら、やけに蒸し暑いんで、冷蔵庫から冷たいお茶を出して飲み、布団に戻ったら、横ぶれが三度。そのあとドーンと持ち上げられました。その拍子に女房の上に乗ったんでしょうね。

地震後、五分間ぐらいは女房も生きていました。お父ちゃん、苦しいと言うから、待っとれやとは答えたんですが、押さえ付けられて全然身動きができない。

その後、女房は吐血して……。その音が腹の下で聞こえたんです。あの音が耳にこびりついています。自分の下で死んだんだ、そういう気持ちとあの声は一生心に残るでしょうね。

心の支えは子どもでしょうね。自分一人だったら、どうなっていたかわかりません。女房なくして子どもなくして、半分気違いになって、入退院を繰り返している人もいますからね。まあ、悪い時ばっかりじゃないと思って、大きな気持ちで、前向いていかなしゃあない。なるべく割り切って、うしろを振りかえらないようにしています。

口でそう言っても、ある時にパッとあの時のことを思い出すことがあるんです。それは生きてる限りどっか片隅に、ずっとあるんでしょうね。

僕が母さん殺したん？

震災後二、三カ月のころだったと思いますが、退院してきたばかりのことです。母親を失った甥は、ときどき、ボーッとして何も話さず、目も虚ろになっているんです。

家の下敷きになったときに、母親が甥の名前を呼びながら助けてと言ったそうです。それで、母親の上になっていた甥は、彼女の首を抱え込んだらしいんです。守るつもりが、力が強すぎて、母親の首をしめてしまい自分が殺してしまったんではないかと、ずっと誰にも言えずに一人で悩んでいたそうです。

それを聞いた内科の先生が、人が死ぬにはすごい力がいるのだから、決して彼のせいではないと言い聞かせてくれて、やっと少し楽になったと言ってました。そんなことで自分を責めていたなんて、本当にかわいそうだったと思います。

甥は今でも、バスの中とか、人が大勢いる中で、突然母親のことを思い出して涙が止まらなくなる時があるそうです。あれは困るんだよと話していました。

私の主人も、地震後しばらくして、おかしくなりました。何もしないで、黙ってじっとしているんです。仕事もなかったし、これから先のことに呆然としていたんでしょうね。

つらいのは当然なんよ

あの朝、長男がトイレに起きて、布団に戻った時に地震がきました。主人と同じ部屋に寝ていた娘二人が亡くなりました。今は、小学生の長男と二人の生活です。震災の後遺症だったのか、長男は朝五時になると目を覚ましてトイレに行くようになりました。一度簡単な心理テストのようなものをさせ、こういうことは大人でもあることなのよと話すと、それからピタッと止まりました。大人でもなるんだということがわかって、安心したのでしょう。

また、一時は家にこもってばかりで外に遊びに出なかったこともありました。人前では明るいのですが、家にいると不機嫌で、ふさいでいて……。私も気が張っていたので、よくけんかになりました。でも、これではいけないと、二人で話し合いをしたんです。

お互いつらかったんですが、長男にも言いたいことを話させました。子どもなりに、気持ちを閉じ込めていたんだと思います。ためていたことを全部、吐き出して話したせいか、徐々にまた外で遊ぶようになりました。

皆さまからいただいたお金は、長男の教育資金に充てさせていただこうと思っております。勉強よりも、自然に親しんで、その中から生とか死とかにふれていってほしいですね。

地震を体が覚えている

二階に寝ていた私と姉、そして岡山に出張していた父は無事でした。でも、ペチャンコになってしまった一階に寝ていた母は、やっと発見できた時にはすでに冷たくなっていたんです。

父は、親類の電話番号などまったくひかえていなかったので、誰とも連絡が取れず、必死に家に向かって車を飛ばしてきました。家に近づくにつれて戦時中の焼け野原のようだったので、もう全員ダメだと思ったそうです。

私は今高校生です。家事と勉強とを両立させていますが、本当に大変です。洗濯とか食事とかの家事をいっさい母に頼っていましたから、亡くなってから、本当に母の苦労を体で感じる毎日です。母が生きていてくれたらなぁって、何度も何度も思いました。

地震後、何に対しても、体が敏感に反応するようになりました。ちょっと物が落ちたり、揺れたりしただけで、頭に意識が届く前に体の方が先にビクッとなってしまいます。きっと体が覚えているんでしょうね。

こんな中でも嬉しいことがありました。何より、ボランティアの方々のご支援です。本当によくしてもらって。行政よりよほど信頼できるし、助けてもらいました。

優しい人や友達に支えられて

妻を失い、もう私のぼやきを聞いてくれる人がいないんです。夫婦にしか分かちあえないことがあるのに、その相手がいない、私にはそれが一番大きい。なんか、一日の活力やハリがなくなって……。誰も代役はできないんですよ。

妻は、子どもたちに

「何か特別なことをした人が優しいのではなく、ふだんから人に対して思いやりがある人が本当に優しい人だと思うよ」

という言葉を残してくれました。

母親と兄弟を失った子どもたちに、避難先のそばの学校へ転校しろとはとても言えませんでした。この上友達まで取り上げるのは、いくら親でもそんな権利はないと思ったからです。

地震後、初めて友達に会ってきた時から、子どもたちは本当に変わりましたね。ずいぶん明るくなりました。友達に会うってことがどれだけ子どもたちにとってよかったか。

ボランティアの人達は、内気で人見知りをする娘達を、入れ替わり立ち替わり、退屈させないようにかわいがってくれました。ああいう人達が本当に優しい人達なのでしょうね。